父としての後藤丹治

後藤　弘

先日、貴学会の機関誌〃論究日本文学〃21号を、父、後藤丹治の追悼特集号とされる事を和田教授より聞き、遺族として誠に有難く感謝に堪えません。紙上をもって厚く御礼申しあげます。

早いもので、父が急死してから三ヵ月過ぎ去ろうとしていますが、生前の皆様の御厚情に感謝しつつ、父としての後藤丹治とでも云うようなものを少し文にしてみたいと、思います。

私がまだ学生の頃の事だったと記憶していますが、父の書斎から無断で一冊の本を持ち出したことがありました。二階で（当時二階が私の室だったので）その本を読んでいますと、父が帰宅して書斎に入りすぐその本のないのを知り、大騒動をしているのです。後で父は、私が持ち出したのを知ったわけですが、これからも察しられます様に父は書籍については、はたからみれば神経質な程、几帳面であったと云えます。

父の書籍は一見して雑然としている様にみえる整理の仕方でしたが、どこに何の書籍があるかすぐわかったと見えます。母等は書斎の掃除には大変気を使っていたようです。このうづ高く積まれた書籍の中で父が仕事に打ち込んでいた姿が今更乍ら思い出となって胸に迫って来ます。〃書籍を大切にする〃これは、父から受けた教えの一つでした。

又、何でも新しいものを重要視した風潮が世の中を支配していた時代、教育界にもそういう時代が敗戦の後、反動で来た事がありました。その頃、父は当時の学生から古色蒼然とした講義だ、等云われたこともありました。そんな苦しい時代も通り、落ちつきを取り戻した社会になった今日まで、本当の自分の仕事をもって生きた父はある意味では幸わせだったかもしれません。学問一筋に生きた父は、反面社交性のなさから、人間関係をうまく運ぶことなど大変下手だった様に思います。特にその様な手腕が必要な文学部長の要職についていた時など、毎日の様に辞任したいと家で云っては母を困らせていたことが思い出されます。だが、こと学問のこととなると驚く程の自信を持っていました。これは母からきいた話ですが若い頃の父は、自説を曲げず、外でよく論争をして来たようでした。論争というよりケンカと云った方がよい位の激しいものだったようです。〃すべて自信をもって進む〃これも又父から教えられた一つです。

父としての後藤丹治、又先輩としての後藤丹治から受けたことは現在の私の一面を型作ったと云えます。その父を失ったことは、私にとって大きな柱を失くした感であります。

最後に父をこれまでに育てて頂いたのは、学界の方を始め、社会一般の人達の御厚情によるものと思いますがここにもう一人の功労者と云うべき母が居たことを御披露して筆をおきます。

（28年日本文学専攻卒、大阪市立城陽中学校教諭）